

インドネシア山村における ドッチビー普及活動

国際基督教大学 2年 牛込麻依



1. はじめに

私は2014年7月1日から7月26日まで、インドネシアの Petra Christian University 主催の Community Outreach Program (COP) というプログラムに、国際基督教大学のサービスマスターという授業の一環で参加してきました。サービスマスターとはサービス活動（ボランティア）を通して自らの学習につなげる、という趣旨のもので、私たち国際基督教大学の学生は、そもそもサービスとは何か、サービスを行うときに注意する点は何か、ということ座学で学んでから実際にサービス活動を行います。

このプログラムに参加するに当たって、私にしかできないことは何か、ということ考えた結果、ドッジビーを現地で広めてくる、ということを見つけました。というのも私は国際基督教大学フライングディスク部 WINDS に所属しており、フライングディスクの楽しさを伝えたいと思ったこと、またボランティア活動をする上で重要な、現地の人々との協力関係を上手く築くということに関して、ドッジビーは子供から大人まで言葉が伝わらなくても楽しめる良い道具だと考えたからです。

このため日本ドッジビー協会代表の稲垣さんに連絡を取り、ドッジビーの寄付をしていただくとともに、何回か講習会に同行させていただいて初心者に教える方法、アイデアを学ぶ、という準備を行いました。なお、寄付していただいたドッジビー23枚は現地の子供たちにプレゼントしました。

2. 実際に行ったことと子供たちの反応

COP のプログラムに参加していたのは日本、オランダ、韓国、中国、香港、台湾、インドネシアの7カ国の学生約120人で、6つの村に割り振られ活動を行いました。ドッジビー普及を行ったのはそのうちの4つの村でしたが、あらかじめやる、と決められていた小学校や幼稚園の壁のペンキ塗り、コンクリートの壁の補修などに大半の時間を費やしたため、ドッジビーは空き時間や他のプロジェクトに混ぜてもらい、ということしかできませんでした。十分な広さがないために単純に投げ合って遊ぶ、ということしかできない村もあったようです。

私が派遣された村では Sports Day という企画があらかじめ組まれていたため、そのプログラムにディスクドッジを組み込んでもらいました。バレーボールコートを使用して、各国の学生と現地の子供たち合わせて約70人が参加してくれました。ルールはインドネシア人の学生が子供たちに通訳してくれました。子供たちは最初こそ戸惑っていたものの、慣れてくるにつれ積極的にドッジビーを取りに行き投げつけていました。やはり女の子より男の子のほうが楽しんでいる印象がありました。参加していた子供

のほとんどが小学生であったため、顔に当たっても痛くない柔らかい素材のドッジビーを使用したのは正解だったと思います。低学年の男の子が高学年の子よりも速くて強く投げている様子を見て、だからドッジビーはおもしろい、と実感しました。





空き時間には学生と子供数人で投げ合ったり、鬼ごっこで当てっこをしたりして遊びました。新しい投げ方をやると真似してくる子もいましたが、同じ投げ方を貫く子が多かったように感じます。教えていないのにガッツのようなルールで遊んでいる子もいて驚かされました。



自ら進んで遊ぶ子供たちと対照的に、上手く投げられない子供やまだ小さい子供はそのとき同時にやっていたシャボン玉に興味を示していました。また、最初はドッジビーを投げているとすぐに飽きてしまってサッカーやバレーボールを始めることが多く、やはりその人気には勝てないのではないかと思いました。

3. 課題、反省と感想

一番の問題点は、ちょうど7月がムスリムの断食期間であったことです。インドネシアはイスラム教が主な宗教のため、多くの村人が断食をしていました。断食中は昼間、水分もとってはいけない決まりのため、激しい運動はあまり好まれません。期間が選べないため仕方がないことでしたが、断食中でなかったらまた違ったのではないかと思います。

次に、COPで企画している他のプロジェクトがあるためになかなか時間が割けなかったことがあげられます。ドッジビーは所詮遊びであり、他の仕事をせずにそれを第一優先にすることはできません。この反省として、常にドッジビーを持ち歩いて少しでも時間ができたら投げる、ということをするればよかったと思います。

もともと実現できたらいいな、というスタンスで計画していたこのドッジビー普及ですが、4つの村で実行に移せたことは大きな収穫です。課題や反省はあったものの、どの村でも子供、学生ともに楽しんでくれたという事実は変わりません。最後のほうには男の子たちが私の姿を見るとドッジビーを使いたい、というジェスチャーをしてくるようになり、とても嬉しく感じました。彼らはドッジビーを渡すと奪うように持って行き、投げながら走り回っていました。その時の彼らの笑顔が頭から離れません。

また、各国の学生にとっても興味深いスポーツだったようで、学生間のコミュニケーションのきっかけにもなりました。あるインドネシア人の学生はサイドスローの投げ方を教えてほしいと頼んできたり、空き時間にみんなでディスクドッジをやるためにみんなを誘ったりとやる気満々でした。言語が違うという難しい環境の中でも、信じていたとおりスポーツはその力を見せつけてくれました。

このプロジェクトの目標は、一年後にCOPに参加した後輩から「ドッジビーやっている子供たちいました！」という報告を受けることです。一年後を楽しみに待ちたいと思います。

4. 最後に

このような素晴らしい経験をさせていただくにあたり、相談にのっていただいた国際基督教大学サービスマニシングセンター黒沼さん、染谷さん、石生先生、アドバイザー高橋先生、スーパーバイザー細谷さん、成瀬さん、ありがとうございました。

そしてドッジビーを寄付していただくだけでなく、講習会に同行させていただいたり相談にのっていただいたりしました、日本ドッジビー協会の横山さん、渡邊さん、今井さん、そして代表の稲垣さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。